ようこそ校長室へ！

Ｎｏ．44
令和５年12月22日
発行 ： 貝塚 敦

に	にこにこ笑顔で	い	いつもみんなで	つ	紡ぎ繋げる心で	に	日本一をめざすのだ

「時代おくれ」と「流行」の間（はざま）で

＜全校集会(R5.12.22)校長講話に追記＞

本日、令和５年の最終登校日です。皆さんにとって、令和５年はいったいどんな一年だったでしょうか。

十年に一度と言われる大寒波の厳しい冬を乗り越え､春になると、中学校での新しい仲間となる新１年生を迎えました。２つの小学校が一つになり、中学校で新しい友達をたくさんつくってほしいなあと願うと同時に、これまで仲の良かった友達についても、些細な言動等で嫌いになってしまうような、いわゆる**蛙化現象**などを起こさずに、さらに良好な人間関係を築いてほしい、そんな強い思いを抱いての令和５年度のスタートでした。

そして、新型コロナウイルスの第５類感染症移行に伴い、部活動の大会は、４年ぶりの**声出し応援**が復活しました。上位大会へと部活動のステージが上がるのと並行して、**地球沸騰化**ともいえる猛暑の夏を迎え、熱中症対策に苦心した体育祭の実施でした。そして、街には**アーバンベア（OS018）**が出没するなど、生態系の歪みや異常気象が懸念される環境問題の深刻さを肌で感じる時代の到来を迎えました。

巷では、大谷選手や**ペッパーミル・パフォーマンス**で有名となったヌートバー選手の活躍によるＷＢＣでの世界一に日本中が歓喜し、将棋の藤井聡太棋士による前人未到の８冠制覇に国民が拍手喝采したのです。野球人口の減少が叫ばれる中で、まだまだ衰えぬ野球人気や､「**観る将**」と呼ばれる将棋観戦を楽しむ人も増えるなどの風潮に触れるにつけ、令和８年度からは部活動の地域移行が完全実施となる過渡期に、あらためて、スポーツや文化芸術活動がもつ力やその重要性を再認識する一年でもありました。

先日の、中学校教育研究会の研修会でのある中学校での授業公開では､「**生成ＡＩ**のアイデアを参考にしながら委員会の活動の企画を考えよう」、という学級活動を参観しました。

もはや、教育活動でのタブレットは文房具の一部であり、今後授業等でもチャットGPTなどがどんどん活用されることが予想される

と同時に、それに並行した情報モラルの徹底もさらに重要度を増すと考えられます。
　そして今、３年生はいよいよ進路に真剣に向き合う時期を迎えました。どこの高校等に進学するということよりも、どんな生き方をすべきか、ということを考えた進路選択であってほしいと願います。社会に出てから、公序風俗に反することも、違法触法行為をすることもない、いわゆる誰にも迷惑をかけずに当たり前のことが当たり前にできる人間として、幸せな人生を送ってほしいものと願っています。むろん、将来的に**闇バイト**に手を染めたり、薬物の使用など、言語道断であります。
　一方で、２年生は１２月の生徒会役員選挙で生徒会四役が決定しました。年明けからは専門委員長等が決定し、**新しい学校のリーダーズ**が揃います。リーダーのみならず、全校生徒一丸となって、新津二中の伝統を引き継ぎ、新たな伝統を創造できる学校づくりをめざしてほしいと願うばかりです。
　そして、これから私たちが目指す最大のイベント、学校行事は、**アレ(A.R.E.)**です。**アレ(A.R.E.)**とは言うまでもなく、卒業式・修了式です。
　３年生の晴れの日に向けて、そして令和５年度の最終日に向けて、全校生徒が有終の美を迎えられるように、この令和５年を振り返りながら、来る令和６年に向けた心の準備がしっかりできる年末にしてください。

　上記のゴシック体・下線の言葉は、実は、今年の流行語大賞の受賞語（**アレ**が年間大賞、それ以外がその他のトップテン選出語）です。やや強引ではありましたが、１年間を、今年の流行語を交えて振り返ってみました。

　さて、よく「不易」と「流行」と言われます。「不易」と「流行」を別々に解すれば、「不易」とは本質的なこと、「流行」とはその時代時代で流行していること、と一般には考えられています。ですから、「流行」とは前述の流行語のように、そのほとんどがいずれは廃れたり忘れられたり使われなかったりするもの、と思われがちですが、そこには多少誤解が含まれているように思われます。
　本来は「不易流行」という四字熟語で一つの言葉です。「不易流行」とは、「いつまでも変わらない本質的なものを忘れない中にも、新しく変化を重ねているものをも積極的に取り入れていこう」という意

味なのです。
　よって、教育活動で例えるならば、「良い授業づくりを心がけて実践するのは不易、つまり本質的なこと。タブレットや生成AIはそのための手法・手段であり流行である。いずれタブレットの使用は頓挫して廃れるだろうから、タブレットは使用しなくてもよい。」という論理は成り立たないということです。
　「流行」を積極的に取り入れながら、それを昇華させて、いずれはそれを「不易」なものにすることこそ、ものごとをブラッシュアップする過程だと考えています。
　決して何でもかんでも新しいことを取り入れたり新しいことに挑戦することが正しいとは限りません。タブレットの授業での活用一つをとっても、それが手段でなくて目的化している授業の例はたくさん散見されるのです。
　大切なのは、「不易」なるもの、つまりものごとの本質がわかっていないのに「流行」をいくら熱心に追いかけても、薄っぺらな結果や効果しか得られないということ。逆に、本質を十分に理解していたとしても、新しいことを取り入れることに臆病だったり変化を恐れていては、前進も発展もないということだと思います。したがって、「不易流行」の本来の意味の王道を進むことこそ、教育する立場の人間に必要な心構えと考えます。

　私は、大学時代に自転車で、日本国中の林道や峠道を中心に旅をして、そのほとんどが野宿生活でした。バブル全盛期の当時、在籍していた大学には、約400ものテニスやスキーのクラブやサークルが存在すると言われ、それが当時の学生の「流行」の最先端であったことは疑いの余地もありません。
　しかし、その真逆の地味でダサくて時代遅れと揶揄されたことに没頭していた自分は、かけがえのない青春時代だったと大きな自負と誇りを今でも抱いています。
　その後の世の中は、全国的にもサイクリングロードが整備されたり、ファッション性の高い自転車も次々と発売されるようになりました。キャンプ場やキャンプ用品も充実し、「ぼっちキャンプ」のタレントはもてはやされ、関連するユーチューブも大人気です。
　でも、四十数年前の「ぼっちキャンプ」の主役は、「ひろし」でなく「あつし」。「あつし」は既に昭和の時代に流行の先の先をひた走っていたわけです。